

# 大学の教育・研究活動から地域社会の持続性への貢献

水嶋一雄<sup>1</sup>Kazuo Mizushima<sup>1</sup><sup>1</sup> 日本大学名誉教授 / Professor Emeritus, Nihon University

## 1. はじめに

筆者は大学退職後、生まれ故郷の富山で生活している。最近、TVや新聞の報道で、地元の大学はもとより、首都圏などの大学からも学生グループが富山を訪れ、各市町村で多様な地域活性化のための活動に携わる様子を目にするようになった。2010年代くらいまでこのような活動は少なかったように思う。近年、大学教員や学生たちの地域社会に対する意識が変化してきたことの現れだと思し、とても喜ばしいことである。

しかしながら、学生たちのそうした活動の多くは目的意識が必ずしも明確ではなく、中には一過性のイベントに終わっているものが少なからずあるように感じる。また、うがった見方かもしれないが、学生たちの活動がTVや新聞報道されればよしとする風潮すら見受けられる。このような活動は、少子高齢化や人口減少に悩まされている地方の地域社会や自治体にとっては期待外れのものと言わざるを得ない。

本稿では、これまでの筆者の活動内容を紹介する。それらは決して一過性のものではなく、自らの研究分野を背景とし、その研究成果を応用しつつ地域社会と向き合い継続してきたものであるということを報告したい。

## 2. 研究内容

筆者は、日本大学文理学部地理学科を退職してから今年で7年目となるが、この間、郷里の富山県入善町で、屋敷林に囲まれた古民家でもある実家で日常生活を送っている。筆者の研究分野は地理学の中の農業地理学であり、農業・農村地域をフィールドとしてきた。研究では各種統計を利用して地域的差異を分析するが、この差異がいかなることに起因するかについては、現地調査を踏まえた考察により明らかにすることが求められる。したがって筆者はこの分野における自らの研究を、常に農

業・農村地域という地域社会と接点を持ちながら進めてきた。この考え方について筆者は、ゼミの学部生や大学院生に、徹底して教育してきたつもりである。ところが、農業・農村地域出身の学部生・大学院生はほぼ皆無という状況であったし、都市地域で生活する学生にとって、農業や農村地域のことはほとんど理解できていないことに気付かされた。そして、研究指導のあり方について、どうすればよいかと自問することになった。

## 3. 動機と理解

1989年3月から1990年3月までの1年間、日本大学のファンドにより在外研究の機会を得た。滞在した大学はカリフォルニア大学デービス校で、その地理学科では、農業地理学の世界的権威であるグレゴール名誉教授と、ヒマラヤ山脈の農山村地域研究のトップリーダーであるアイブス主任教授が教鞭を執られていた。彼らの講義を何回か受講する機会を得る中で理解したのは、両先生とも現地における地域研究の必要性を重視していることであった。加えて、デービス校は全米の中でも上位3位に入る農業・畜産・醸造などを専門とする大学であること、大学の立地するデービス市は環境問題を意識した都市政策を推進していることも、筆者の研究を発展させる上で大きな意味を持った。滞在中に筆者の興味を引いたのは、市の中央部で週2回開催されるファーマーズマーケットであったが、滞在した1年の間には余り盛り上がりを感じることはなかった。

1990・2000年代には、ほぼ毎年のように夏休みを利用してデービス市を訪問する機会をもったが、その間に、このマーケットの規模が徐々に大きくなっていくことを実感した。訪れるようになった当初は、屋根のない状態で農産物を販売するものであったが、後に市の政策でマーケット会場は屋根付きとなり、出店する販売者もその数を増やしていった。このマーケットの中で筆者が目にしたのは、売り場の前面に「CCOF」の看板を掲げて、農産物やワインなどを販売する店を多く確認できたことである。CCOFとは「カリフォルニア認証有機栽培農家」のことであり、看板は、「私たちが販売する農産物やワ

インの原料は有機栽培によるものである」ことを顧客に知らせるものであった。この有機農産物や有機食品は、1990年代には欧米諸国で大きなトレンドになっており、このマーケットはこれを具現化したものであった（写真1）。



写真1 カリフォルニア大学デービス校の立地するデービス市のファーマーズマーケットの販売店。CCOFの看板が掲げられている。

#### 4. 理解と応用

農業・農村地域を研究分野とする筆者は、デービス校やファーマーズマーケットで得られた知見を、ゼミ指導の中で活かすことを考え続けた。熟慮の結果、今から30年前の1993年頃にゼミ生に米作りを体験させようと考え、活動内容を学部3・4年のゼミ生に提案した。ゼミ生は活動に興味を示し賛同し、ここに入善町での米作り体験が始まった。大学生が農業・農村地域に飛び出した瞬間であった。これ以降の毎年の活動は、筆者が大学を退職するまで継続することになった。

この活動では、単に大学生に米作りを体験させるだけではメッセージ性がない。デービス校やファーマーズマーケットの知見にもとづいて、農業や化学肥料を使用せず、有機肥料のみを用いた有機栽培を実践しようと考えた。この有機栽培は、食の安全・安心のために大きな意味を持つばかりではなく、水環境や生態系を本来の姿で維持する上でも重要で、自然環境の保護・保全を意図した取り組みである。こうした環境の持続性を目的に行われる活動は、今日に至って話題として取り上げられることが多くなったが、筆者らの活動はそれを先取りしたものであった。

1年間の手作業による米作りは以下の通りである。まず、田植えの準備として、かつては田の管理者である農場長が、また近年では筆者が、4月にトラクターによる田の耕起、代掻きを行う。そして5月のゴールデンウィークに学生たちが集合して田植えをおこなう。除草剤を使

用しないため、6月には2回、田の草取りをする。この作業は有機農業にとって最も重要な作業であるが、学生には厳しい重労働で、毎年この作業に音を上げている。各作業の間における田の管理、とくに稲作にとって重要な日ごと水の管理は、農場長や筆者自身がおこなった。9月には学生たちにとって待望の稲刈りを迎える。もちろん、田植え、草取り、稲刈りのいずれもが、多くの学生たちにとっては初めての経験であり、熱心に作業を行うが、とくに稲刈りは1年間の成果がわかるために最も力が入る作業となる。稲刈り鎌の使い方はぎこちなく、地元の人々の指導を受けながらも、10アールにも満たない田の作業に多くの時間を要することになる。最初の頃は乾燥のため、稲架がけをしていたが、途中からはコンバインで脱穀し、空気による自然乾燥後に調整（玄米に）した（写真2・3）。



写真2 水嶋ゼミの3・4年生が30年間継続してきた黒部川扇状地東側の舟見野台地上にある水田での米作り。田植え風景。



写真3 同 稲刈り・脱穀の様子。

収穫した米をどのように処理するかについては、学生たちと議論した結果、大学祭に焼きおにぎりとして販売することになった。もちろん、その重要な目的は、食の安全性や自然環境を考慮した米作りについて、多くの人たちに理解してもらえるようPRすることにあった。学生たちが取り組んだこの活動は、TVや新聞、町の広報

そして地元の有線 TV などに取り上げられており、筆者らの米作りの内容は、30 年前から今日まで富山の地域社会に大きなインパクトを与えてきたと自負している。

## 5. 地元研究所の活動と貢献

現在、筆者は黒部川扇状地研究所の 4 代目所長として学生による米作り体験をはじめ、多くの活動に取り組んでいる。富山県入善町にある研究所は、地元出身で恩師でもある籠瀬良明博士の発案で 1975 年に創設されたもので、2025 年には 50 周年を迎える。その創設時から筆者も携わってきたこの研究所は、黒部川扇状地における多様な地域研究活動を通じて、地域社会の発展に寄与することを目的としてきた。この考え方は現在も踏襲されており、会員約 140 名が主として地域研究を行いながら、町民への貢献のため、年間 4 回の研究例会を開催し、講師による講演や研究報告会を実施している。このほか、扇状地の持つ地域資源の魅力と自然環境の保護・保全の重要性に関する理解を促すために、小学校の児童や地元の高校生に対して、現地での様々な活動を継続して実施している。たとえば、扇状地で巡検を実施し、高校で地理を担当する先生方が教材研究をするためのお手伝いをし、近年では観光客に扇状地地域についての理解を深めてもらうために、会員たちによるガイドも実施している。これらの活動は、一般社団法人として法人格を得てから一層活発となっている。一連の活動は機関誌「黒部川扇状地」に網羅されているが、これらの活動が評価され、研究所は環境大臣賞、富山県知事賞など、これまで多くの機関から表彰されている。

## 6. パキスタン研究と少数民族への貢献

筆者が、最初にパキスタン北部地域に足を踏み入れたのは 1989 年である。日本大学創立 100 周年事業の一つとして企画された活動に参加する学生を率いての訪問であった。以降、継続してこの地域を訪れてきたが、訪問し始めた初期の頃は未知の地域を探検するということが目的としていた。しかしながら、前述したアイブス教授の影響を受け地域研究をより重要視するようになってからは、それを具体化するため、この地域に居住し過酷な自然環境下で灌漑農業と牧畜によって生活している少数民族に焦点を当て、その実態を研究することが主要な目的となった。フィールドとしたアッパーフンザのゴジャール地区は、標高 2500m 前後で年間降水量約 350mm にも満たない山岳乾燥地域の環境下にあり、そこに、少数民族であるワヒの人々が暮らしている。ワヒの



写真4 パキスタン北部ゴジャール地区フセイニ村の俯瞰写真。写真中央部右下の緑地がフセイニ村の農地と集落。中央上部から左下部へと流れ下るグルキン氷河の左岸側モレーンに接して立地する。



写真5 フセイニ村と村の出作り農地のある対岸のザラバードを結ぶ吊り橋。フンザ川に架かるこの吊り橋は、全長約 200m あり、世界一危険な橋として紹介されている。住民（女性）たちは朝この吊り橋を渡り、農作業を終えた後に村に帰る。筆者もザラードの調査のため、何度となくこの吊り橋を利用した。



写真6 同吊り橋を 2023 年 7 月に訪問した時、ここに観光客が殺到しているのには驚いた。今日ゴジャール地区は観光地としても脚光を浴びるようになった

人々は、パミールからヒンドークシュ、カラコラムの山岳地域に居住しており、かつては一つの民族集団として地域一帯で広く交流があった。それが第二次世界大戦後に、その山岳地域内に国境線が引かれることになり、彼らの居住地域は、パキスタン北部、アフガニスタン北東部、タジキスタン南東部、中国新疆ウイグル自治区西部に分割された。それぞれに各国の体制の中で生活することになり、ワヒの人々同士の国境を越えた自由な交流は失われ、暮らし向きにも差異が生じてきている。

パキスタン北部のゴジャール地区では、作物栽培と農業用水の関係について調査を進めた。地区内の中央部にはインダス川の支流であるフンザ川が貫流するが、多くの村々では、谷底部を流れるその本流から水を確保することは不可能であり、河谷側面に流れ下る氷河を水源として利用している。したがって、集落や農地は氷河から溶け出す水を利用しやすい地点に立地している。これらの村々の中で、とくに筆者が注目した村がフセイニ村であった。グルキン氷河に接するように立地するこの村は、氷河側面に厚く堆積するモレーンの下を流れる融氷水を、モレーンに開削した5本の簡易用水路で確保し、農業・生活用水として利用していた。しかしながら確保できる水量は少なく、不安定であった。この問題については、村の住民たちの協力を得て綿密な調査を実施し、これまで多くの論文や、国際シンポジウムで報告してきた(写真4・5・6)。

これらの一連の調査を推進する中で、ワヒ研究の第一人者であるドイツ、ベルリン自由大学のヘルマン・クロイツマン教授(現在は名誉教授)と出会った。それ以降、同教授とは現地調査の協力に加えて、日本で開催した国際山岳年の諸事業を、北海道大学地球科学研究院教授の渡邊悌二先生の協力も得て実現させた。また、この2人には2022年12月に開催した「国際山岳年プラス20シンポジウム in 黒部」でもお世話になっている。この2人の先生の研究姿勢にも、筆者と同様、地域調査の価値と役割を重視するアイブス教授の考えが受け継がれている。ワヒの調査・研究を進める過程で、筆者はクロイツマン教授に、4カ国に分断されたワヒ同士の交流を促すため、ワヒサミットの開催を提案した。そしてその同意を得るとともに、パキスタン北部に居住するワヒの人々とも相談して実行に移した。こうして、2015年8月にゴジャール地区パサー村で「ワヒ民族の持続的発展に関わる国際シンポジウム」が実現する運びとなった。2日間のシンポジウムでは、ワヒに関する複数の研究者による講演や、アフガニスタン、タジキスタン、パキスタンの3カ国それぞれのワヒ代表者による報告があった。登壇

者に加えてパキスタン国内にあるワヒの村々から集まった多くの聴衆が一堂に会することになり、このサミットを成功裏に終えることができた(写真7・8)。



写真7 ゴジャール地区パサー村で開催した「ワヒ民族の持続的発展に関わる国際シンポジウム」のレセプションで。



写真8 同シンポジウムの様子。

## 7. おわりに

本稿では、筆者の教育・研究をベースとしてこれを具体化した、地域連携活動の一端について説明してきた。筆者はこれまでに行ってきた調査・研究を地域社会と深く関連付けることで推進できたと考えている<sup>注1)</sup>。教育・研究などの専門性が異なれば、筆者の活動の有り様は必ずしも参考にならないかも知れない。しかしながら、どのような専門分野であっても、地域社会と密接に連携する活動を推進することは重要だと考える。地域社会は大学や研究者と連携する具体的な活動を待っている。

むしろ、地域連携は言うほどに易しいものではなく、連携の理念を具体的な活動として実現し、さらにそれを持続的に推進することは、なかなか困難ですらある。その困難を克服するためにも、教員同士、あるいは学生と教員が大いに議論をする必要があり、地域社会との関係性の中で、連携活動の目的やその活動を推進する担い手などについて十分な検討を行うことが求められる。グ

ローバル化する社会が抱える課題, SDGs を実現するための具体策, 地方の地域社会における深刻な少子高齢化・人口減少問題などは, いずれも待ったなしで解決が求められている。この大学地域連携学会が少しでもこうした国際社会や地域社会の問題・課題に貢献できる組織であることを期待したい。

注 1

本稿で紹介した研究成果に関わる参考文献(一部)は以下の通りである。参照されたい。

水嶋一雄(2000) わが国における環境保全型農業の現状と課題(第4報)ーカリフォルニア州の認証機関・CCOFの活動と実績ー。日本大学文理学部自然科学研究所「研究紀要」35:1-13.

水嶋一雄(2008) 環境保全型農業。「仕事が見える地理学」所収。古今書院:64-72.

水嶋一雄(2015) Change of the Livestock Farming in Hussaini Village, Gojal District, Northern Pakistan. The Committee of GMF (Global Mountain Forum): 59-65.

水嶋一雄(2016) An Experiment in Order to Develop Sustainability of Wakhi People Crossed the Border. IGU

33<sup>rd</sup> International Geographical Congress Beijing, China.

水嶋一雄(2016) The Changes in Regional Structure and Land Use Related to External Factors in Hussaini Village, Northern Pakistan. KREUTZMANN Hermann and WATANABE Teiji ed. Mapping Transition in the Pamirs, Springer: 215-227.

水嶋一雄(2016) パキスタン北部地域ゴジャール地区で発生した大規模土砂崩落とこの影響。日本大学文理学部自然科学研究所「研究紀要」51:47-62.

水嶋一雄(2019) 黒部川扇状地の散居村と水ー自然と一体化した豊かな生活空間。BIOCITY No.80:81-89.

水嶋一雄・落合康浩(2021) キルギス南部アライ谷における農業と生活からみた地域の持続性。「変わりゆくパミールの自然と暮らしー持続可能な山岳社会に向けて」渡辺悌二・白坂 蕃 編著 所収:331-345.

水嶋一雄(2022) 黒部川扇状地ー農業用水の開削で荒野を穀倉地帯にー。土木技術 civil engineering for life, 77(7):42-49.

水嶋一雄・清水知香子(2023) 黒部川扇状地東側に位置する舟見野台地末端の上水道施設についてー大家庄金山地区を例としてー。研究紀要 黒部川扇状地, 48:1-10.